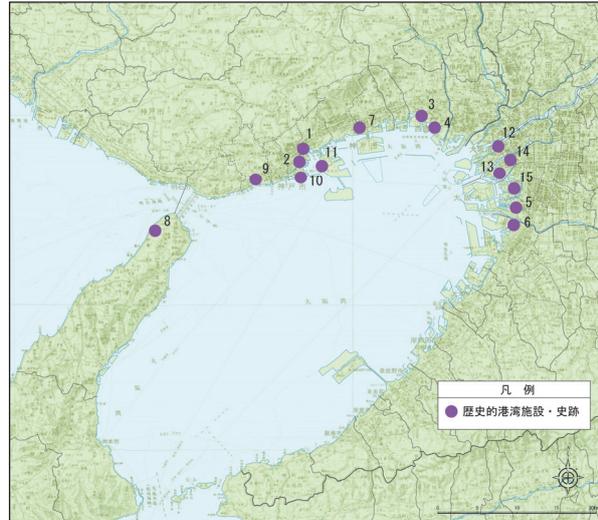


大阪湾の港湾は、難波津（大阪港）、大輪田の泊（神戸港）等と呼ばれた時代から、中国大陸や朝鮮半島等との交流拠点として重要な役割を果たしてきた。

近代以降においても、臨海部に工業地帯が形成され、我が国の発展に貢献してきた。このような中、大阪湾内には「今津灯台」や「住吉高燈籠」を始めとして歴史的港湾施設が残っている。

歴史的港湾施設・史跡の位置



【歴史的港湾施設・史跡】



①神戸港

神戸港は、「務古水門」「大輪田の泊」と呼ばれていた古くから中国大陸や朝鮮半島の港と交流していた。また、平安時代には、「経ヶ島」の築造を行う等、国際貿易の拠点として発展してきた。

室町・江戸時代には、「兵庫の津」と呼ばれ、鎖国政策下の江戸時代には、国内交通の要衝として、重要な役割を果たし、そして、慶応3年の開港後は、人・物・情報が行き交う拠点として、また、国際貿易港として常に最新の設備を整備し、世界を代表する港に発展した。

②神戸港旧信号所

神戸港旧信号所は大正10年（1921年）に新港第4突堤に建設され、昭和12年（1937年）に新港第5突堤に移された。建物の高さは46.3mあり、当初は信号旗を組み合わせて港に出入りする船に信号を送り、交通整理を行っていた。後に発光信号に変わったが、現在揚げられている旗は、当時の旗による信号を再現したものである。

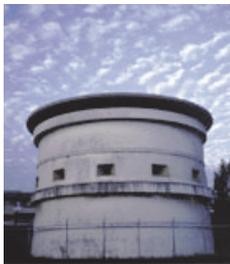
建物の内部には2階にのぼるための手動のエレベーターがあり、2階では望遠鏡を使って航路の監視等も行われていた。

昭和60年（1985年）になり、ポートアイランドに新しく信号所が設置されたため、業務が縮小され、平成2年（1990年）にはその役目を終えた。



③西宮砲台跡

幕末の頃、国防不安を感じた江戸幕府は、勝海舟の建築をいれて大阪湾沿岸に砲台を築いた。西宮砲台はそのひとつである。文久3年（1863年）着工、完成をみたのは慶応2年（1866年）下半期であった。



④今津灯台

この灯台は、江戸時代後期の文化7年（1810年）に大関酒造の長部家5代目長兵衛さんが今津付近から江戸に酒を回漕する船（樽回船）の目印のために、私費で建設した灯明台（昔の灯台）が始まりである。

その後、度々修理・改修が行われたが、現在でも付近を航行する小型船等の安全を見守る灯台としての役目を果たしている。現在の灯台は昭和59年（1984年）に創建当時の姿に復元されたものである。



2. 港湾 (1) 歴史的港湾施設



⑤ 住吉高燈籠

難波江の浅瀬に我が国初の灯台として鎌倉時代に創建されたといわれている。



⑥ 旧堺燈台

明治初年までには、和式の燈籠堂（燈明台）と呼ばれるものが小波止（現在の大浜北公園）にあったが、明治9年（1876年）の南北波止（はと）の延長事業に伴って、新しい燈台の必要性が高まり、また港にかかる期待も大きく、当時の有力者は、堺県を動かして市民の基金と国の費用で燈台を築造するよう国に願い出たが、かなわなかった。

しかし、市民の熱意はやみがたく市中の有力者から集めた基金と県の補助金で港の改修と旧大波止先端に洋式燈台の築造を成し遂げた。



⑦ 神戸税関

神戸税関の前身は、慶応3年12月7日（1868年1月1日）の兵庫開港と同時に徳川幕府によって開設された兵庫運上所である。

明治5年（1872年）11月28日に全国の運上所が税関として名称を統一されることとなったのを機に、翌明治6年（1873年）1月4日「兵庫運上所」は「神戸税関」と改称された。



⑧ 江崎灯台

明治4年（1871年）、イギリス人技師リチャード・ヘンリー・ブライトンによって、御影石で建てられた日本で8番目の洋式灯台。高さ8.27mで、御影石を積み重ねて造られている。



⑨ 須磨灯台（旧和田岬砲台）

元治元年（1864年）大阪湾岸防衛のため、勝海舟の設計で完成したもので国の史跡に指定されている。中央に石ほ塔という丸い砲台があり、直径12.12m、高さ10.60m、砲門11ヶ所となっていた。当時は「お台場」といわれて、人々に注目されていた。大砲はすえられることなく終わった。



⑩ 旧和田岬灯台

もとは兵庫区の和田岬にあったもので、明治17年（1884年）にそれまでの木造灯台を鉄骨に改築したもので、明治初期の鉄骨灯台としては、現存する最古の物のため明治38年（1905年）に和田岬灯台が廃灯になったあと、明治39年（1906年）に永久保存するため現在地の海浜公園西端に移設された。



⑪みなと異人館

もともとは明治39年（1906年）にイギリス人ヘイガー氏の私邸として北野町4丁目に建てられた木造かわらぶき2階建ての建物であった。現在、みなと異人館の2階は一般開放されている。



⑫天保山砲台・天保山灯台

太平の御代の行楽地は嘉永7年（1854年）、ロシア戦艦ディアナ号が天保山沖に停泊して一変する。異国船来航に危機感を募らせ、幕府は元治元年（1864年）、天保山を削って平坦な土地とし、台場を築いて砲台とした。

明治も前半期の天保山は陸軍省管轄の砲台となる。加農（かのん）砲が並んでいたのだろう。古地図にも函館の五稜郭と同じ星形の西洋式縄張り記される。琴石画伯は軍事機密は避け、明治5年（1872年）に建った白色木造の灯台を挿し絵に描いた。



⑬大阪開港の地

長い鎖国後、ようやく諸外国へ門戸をひらくことになり、明治元年（1926年）7月15日大阪では川口を開港場とした。ここには運上所（うんじょうしょ）（税関）、外国事務局等が設置されて、名実ともに開港場としての姿を備えていた。つづいて明治3日年（1870年）には電信局もおかれ、川口一造幣局間・神戸間の2線が開通した。しかし川口は名のとおり、安治川上流の小規模な河川港であったため、外国船の来航が減少し大阪経済も沈滞したので、明治30年（1955年）から、現在に見られる市営の築港工事がはじめられた。



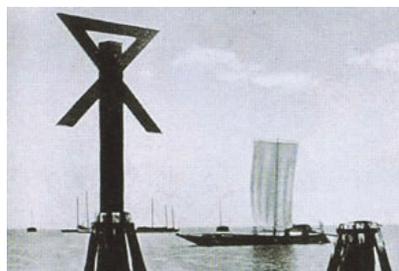
⑭大阪商船（株）天保山乗場

昭和12年（1937年）に建てられた鉄筋コンクリート3階建ての建物。



⑮旧大阪港北防波堤灯台

明治39年（1906年）から昭和63年（1988年）の約83年の長きにわたり、大阪港を航行する船舶の安全の為に灯火をともし続けた。



⑯みおつくし

みおつくし（滞標）とは、昔、難波江の浅瀬に立てられていた水路の標識のことである。大阪の繁栄は昔から水運と出船入船に負うところが多いことから、人々に親しまれ、港にもゆかりの深いみおつくしは、明治27年4月より大阪市の市章とされている。